



4 効果的な事例

(1) ステージⅠ 保幼小連携教育

- 豊かな心と生きる力を育む保幼小連携
(香南市夜須町地域)
- 実効性のあるスタートカリキュラムの創造
(香南市立野市小学校)

豊かな心と生きる力を育む保・幼・小連携
(香南市夜須町地域)

1 学校や地域の状況
○県東部の香南市は、平成18年の市町村合併で保・幼の行政窓口を市教育委員会に一本化している。
○夜須町では、1～3歳までの子どもは保育所、4・5歳は幼稚園で幼児期を過ごし夜須小学校・中学校へ同一の集団で就学・進学する。また、保・幼・小・中が隣接しているの、比較的連携しやすい条件にある。
○施設園芸が盛んで、朝早くから夕方遅くまで働いている保護者が多い。

2 取り組みのポイント
保育所・幼稚園は、遊びを中心とした生活を通して、一人一人に応じた総合的な指導を行い、小学校では、時間割に基づき、各教科の内容を教科書などの教材を用いて学習を行う。
そこに、生活の変化(段差)が生じ、その変化が大きければ、小学校生活にうまく適応できない状況が生まれる。
子どもの生活が入園や入学を機に変化しても、子どもたちの発達の連続性を確保するため、不必要な段差を取り除き、円滑な接続を図ることが必要であることから、次の3点にポイントをおき、研究を進めてきた。
○幼児と児童にとって、ともに育ちや学びにつながる交流活動を行う。
○保育士・幼稚園教員・小学校教員が、保育・教育内容や指導方法の相互理解を図る。
○保・幼・小連携を年間指導計画に位置付ける。

3. 具体的な取組
(1) 交流活動
子ども同士の交流活動は、「やってあげる」や「お招きする」というものではなく、双方に学びのある、ともに主体として活動できる内容でなくてはならないと考える。
そのため、事前・事後の話し合いを大切にして取り組んでいる。
○事前の話し合い(互いのねらいや目標を確認し、活動計画を立て指導案を作成する。)
※ 指導案は、資料編を参照
○保育士や教師が協働で子どもたちに関わり、活動を進める。
○事後の話し合いを通して評価し、次の活動に生かしていく。
～交流活動例～
＜保・幼交流＞
・ 虫取りやしっぽ取りなどのゲームの交流
・ 歌やダンスなどでの交流
＜幼・小交流＞
・ 生活科の授業を生かしての交流
・ 社会科の授業を生かしての交流
・ プール遊びの交流
＜その他＞
・ 保・小交流や幼・中の交流の工夫



(小学校のプールでの交流活動)

(2) 保育士・教員の情報交換や相互理解

①連絡会の開催

- ・ 年度当初に引継ぎ・年間計画についての話し合いをもち、担当者が代わっても前年度の取組を生かしていく。
- ・ 適宜、交流活動の事前・事後の話し合いや活動計画の確認をする。

②保育参観・授業参観

互いに、保育所や幼稚園、小学校を訪問し、保育や授業を参観し、時には事後の協議に参加する。

③合同研修会の開催

保・幼・小の保育士・教員が一堂に会し研修することで、保育・教育内容等の共通理解を図り、互いの情報共有の場とする。

(3) 年間指導計画の作成

年度当初に計画・立案し、必要に応じ見直ししながら、次年度につなげていく。

4 取り組みの成果と課題

<成果>

- ☆ 校種間で子ども同士の交流をすることにより、体験の幅が広がり、年上の人に対する憧れの気持ちを抱き、子どもたちの活動意欲の高まりにつながった。
- ☆ 小学生にとっては、年下の子どもたちと交流することにより、同学年で行うときよりもあきらめず取り組む姿が見られるようになった。
- ☆ 子どもたちが、他校種の先生と顔見知りになり、新しい環境にも慣れスムーズな移行につながっている。
- ☆ 事前の話し合いを持つことで、活動内容や援助について確認し、きめ細やかな指導ができた。また、事後の話し合いを持つことで、成果や改善点が出され、次の活動につなげることができた。
- ☆ お互いの子どもの発達段階や保育・教育内容等知り合うことができた。
- ☆ 保育士・教員間で日常的に子どものことについて話し合うようになった。
- ☆ 連携に取り組むことにより、それぞれの保育・教育の見直しができた。



<課題>

- ★ 話し合いや変更になった場合の交流活動の時間確保が難しい。
- ★ 交流活動において、それぞれのねらいを達成するために、より相互理解を深め、一体的な活動を作り上げていかなければならない。

5 普及のポイント

- 地域の実態に即した計画の実施
- お互いを理解しようとする姿勢とそのための協議の場の設定
- 市町村関係機関の参加の必要性

実効性のあるスタートカリキュラムの創造（香南市立野市小学校）

1 学校や地域の状況

野市小学校は香南市野市町に位置し、高知県東部では最大規模（学級数27、児童数603名）の小学校である。

連携の好立地条件として、野市小学校の南側に隣接して野市幼稚園（3～5歳児、117名）、西側に隣接して野市保育所（1～5歳児、201名）があり、日常的に交流できる環境にある。

2 取り組みのポイント

○生活科を中心とした小学校スタート期の構想（スタートカリキュラム）

○年長児との交流活動

3 具体的な取り組み

年長児にとって、「段差」と考えられる小学校の状況は、①教室で座席に座ることがほとんどになる ②学習内容が決められている ③時間が決められている ④集団行動が基本になる等である。

これらの「段差」を小さくし、円滑に接続するための「スタートカリキュラム」を構想した。

(1) 生活科を中心とした小学校スタート期の構想（スタートカリキュラム）

実効性のある小学校スタートカリキュラムとして、登校後の居場所づくり「プレタイム」、学びとつなげる「わくわくタイム」、生活科を中心とした合科・関連指導「ぴかぴか かがやく のいちっこ」を設定した。

プレタイム



4月。登校してから始業までの間、新入生が自分が行きたい場所を選び、学級に関係なく友だちと楽しく過ごせるように、学級担任以外の教員が、ワークスペース（お絵かき・積み木）、図書室（読み聞かせ）、音楽室（折り紙・カルタ・絵本）で一緒に過ごした。

わくわくタイム

4月から5月。小学校の授業時間に徐々に慣れるために、1校時を10分から30分程度に区切って集中できるようにした。授業の中では、養護教諭や司書教諭等による「ミニ授業」、遊びやゲーム・具体物を使った楽しい学習、上級生の授業見学等、活動を取り入れながら小学校の生活に興味を持てるようにした。

ぴかぴか かがやく のいちっこ

未分化の学習から分化した教科の学習へつないでいく過程をカリキュラムに位置付けた。生活科「学校をたんけんしよう」で見つけたことを、ことばや数で表現したり、絵に描いたりしながら、徐々に教科の学習につなげていった。また、体験や活動を通し、学校の施設・先生や友だちに関心を持たせ、安全で活動的な学校生活を楽しく過ごすことができるようにした。生活に目を向け学級会等で話し合い、考えることにより、学校生活に必要な事柄を身に付けた。

(2) 年長児との交流活動 (表中の事例はH21年度の実践)

交流活動は、年長児と小学生がかかわりあうことにより、年長児が小学校に入学するまでに、学校施設を知り小学校の教職員や上級生に親しむことで、年長児にとっての小学校への段差をなくすことをねらいとして行った。

| | 1年生と年長児 | 5年生と年長児 |
|-----|---|--|
| 1学期 |  | 7月 「年長さんと仲良くなろう」 —幼稚園・保育所に行って遊ぼう— |
| 2学期 | 10月 「休み時間に一緒に遊ぼう」 11月 「焼き芋と一緒に食べて遊ぼう」 | 9月 「運動会に参加してもらおう」 11月 「一緒にお弁当を食べよう」 |
| 3学期 | 1月 「一緒に昔遊びをしよう」 2月 「学校のことを教えてあげよう」 | 2月 「校舎を案内しよう」 3月 「一緒に給食を食べよう」 |

4 取り組みの成果と課題

～H21年度1年生の保護者及び1年生児童（聞き取り）へのアンケート結果から～

(1) 成果

《1年生の保護者》

アンケートの中の「プレタイムは来年もあったらいいと思いますか」という項目に対しては、「そう思う」「ややそう思う」という肯定的な意見は全体の83%、「5年生との交流はこれからもあったらいいと思いますか」という項目に対しては、「そう思う」「ややそう思う」という肯定的な意見は全体の98%であった。

また、記述内容では「幼稚園の頃から、小学校のお兄ちゃん、お姉ちゃんとの交流があり、そのおかげで自然に小学校生活になじんでいけたような気がします」「ずいぶん前から1年生になることがとても楽しみで、学校に自分の席があって、毎日新しいことを学習できることがとてもうれしい様子です」等の意見が多くみられた。

《1年生の児童》・・・6月のアンケート実施のため、言葉を添え、挙手で人数を把握した結果。

「学校は楽しいですか」という項目に対しては、「楽しい」と回答した児童は全体の97%、「今年も上級生と一緒に遊んだり勉強したりしたいですか」という項目に対しては、100%の児童が「したい」と回答している。

これらのことから、プレタイムは概ね肯定的な評価を受けており、また、5年生や1年生との交流も高い割合で肯定的に受け止められていることから、スタートカリキュラムは保護者にとっても小学校生活の不安解消につながる取組として効果をあげている。

(2) 課題

学校として組織的・効果的にスタートカリキュラムを構築・実践すること、「わくわくタイム」や「合科・関連的な学習としての生活科」について保護者への周知を図ること等、実態に即した手立ての工夫が必要である。

5 普及のポイント

- スタートカリキュラムの作成と活用
- 保護者へ保幼小連携の重要性の普及・啓発